

問題多い食生活、問題多い農業

安全、安心な食べ物を作るため消費者と生産者の協力を

(山本 博史 農民運動全国連合会・参与の講演)



(講演する山本博史氏)



(山本氏を紹介する平田理事)

山本氏のお話は、日本の食生活、そして食を支える日本の農業の深刻な問題点をわかりやすく解明してくれました。(いただいた資料は配布していますが、必要な方はご連絡ください)

1 輸入に頼る食べ物、食べ物の西洋化

日本は世界人口の2パーセントを占めるが、その日本が世界の総輸入食品量の10パーセントを輸入している。世界から食料を買い集めている。遠くから食料を運ぶために、長期保存のための化学薬品を大量に使用している。ポストハーベストというが、とうもろこしなど船積みしたあとも保管中に農薬を散布する。

安くて見かけのよい加工食品が次々に販売されるが、これらの食品には化学合成薬品が大量に使用されている。仕事に追われる生活のなかで外食、中食がどんどん増えているが、この原材料も輸入の食品が多く、化学薬品が大量に使われている。(中食＝調理済みの食品を食べる)

食べ方も問題が広がっている。早食いや立ったままで、仕事の合間の短時間の食事。高齢者の独居の方など孤食、手軽に手に入るおなじ食品をくりかえしたべつづける単食も広がる。

2 食生活を変えてしまう背景—輸出拡大だけが目的の貿易体制

WTO(世界貿易機関)は自由貿易推進といっているが、中身は自由貿易ではない。農産物輸出の拡大だけが目的で食の安全は無視される。WTOの食品衛生協定では浪打ぎわの検疫、検査の簡略化が進められている。輸入の増加と食品衛生管理の規制緩和セットになっており、食品衛生管理の規制緩和とともに、冷凍餃子事件のような問題が多発している。

最近の汚染米流通事件の米は、WTOの協定による「国の輸入義務がある」という閣議決定により輸入し

たものである。自分の国で生産する能力があるものを、毎年輸入を強制される協定が問題である。

3 安全、安心な食生活にむかって

世界的な食料危機のなか外国だけに頼るやり方はやめなければならない。食料は買えばよいという国策の転換が必要である。安心な食べ物を自分の国で作る大切さが自覚され「食糧主権」を掲げる政府も生まれている。生活協同組合のなかでも、より安く買い叩き、大量に販売するやり方をまねたところも出たが、よくみて選ばなければならない。消費者も生産者も協力し、安全な食糧をつくる努力が求められる。

第2次懇談会

